

## 本校研究の基盤となっている主な理論

### 社会構成主義

現実の社会現象や、社会に存在する事実や実態、意味とは、すべて人々の頭の中で作り上げられたものであり、それを離れては存在しないとする社会学の立場。学習とは、外から来る知識の受容と蓄積ではなく、学習者自らの中に知識を精緻化し（再）構築する過程であるとする。

社会構成主義の学習観は、次の3点を前提にしている。

- ① 学習とは、学習者自身が知識を構成していく過程である。
- ② 知識は状況に依存している。そして、おかれている状況の中で知識を活用することに意味がある。
- ③ 学習は共同体の中での相互作用を通じて行われる。

このような前提により、学習者は受け身的な存在ではなく、積極的に意味を見つけ出すために主体的に世界とかかわる存在になる。一方、教師は学習者を支援する役割を担うが、学習者にとっては多くのリソースの一つと見なされる。

### 正統的周辺参加論

学習というものを「実践の共同体への周縁的参加から十全的参加(full participation)へ向けて、成員としてアイデンティティを形成する過程」としてとらえる。

学習者が獲得するのは環境についての認知的構造ではなく、環境の中での振る舞い方（状況的学習）であり、実践コミュニティに新参加者として周縁的に参加し、次第にコミュニティ内で重要な役割や仕事を担っていくプロセスそのものが学習であるとする。

### ナラティブ・アプローチ

ナラティブ（語り、物語）という概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法。

「語り」も「物語」も単なる出来事だけでできあがっているのではなく、その時の「思い」や「感情」なども語られるが、「思い」や「感情」だけでは「物語」は成立せず、出来事があるのはじめてその時の「思い」や「感情」が意味をもつ。複数の出来事の連鎖、すなわち、複数の出来事を時間軸上に並べてその順序関係を示すことが、ナラティブの基本的な特徴である。学習論としては、「我々はそれぞれの経験に沿って自らが生成した物語に意味がある」ことを前提とする。

### 認知的個性 (CI)

さまざまな認知的な能力やスタイルなどの個人差を包括的にとらえ直す個性の新たな概念。学習において、個人のもつ障害や才能も含めて多様な認知発達の特徴・個人差を、「認知的個性」(CI: Cognitive Individuality)という包括的な概念でとらえ直すことで、児童生徒の認知的個性を識別して、学習を個性化する方策を探ろうとする。